

Episode

1

おとな君と
搾精ガジェット
研究員



おとな君の
からっぽになるまで。

お試し版

R18
ADULT
ONLY

VOICWARE



「いらっしやい」

お姉さんはドアを開くと、おとな君を笑顔で迎えた。

「ちようどお昼ご飯できたところよ。そのスリッパ使って」

部屋の中から美味しそうな匂いがしている。

「お邪魔します」

おとな君は言われるままスリッパをはいて、部屋にあがった。

「おじさんとおばさん、二週間もないんじゃ大変ね」

すなお
砂尾おとな君は素直でおとなしい男の子。

学校が夏休みに入るやいなや、両親が海外旅行で二週間留守にするため、今日からマンションの隣の部屋のお姉さんに食事の面倒を見てもらうことになった。

もともとお姉さんには留守がちな両親にかわり夕食を用意してもらったり、勉強をみてもらったりする間柄だ。

「…どうしたの？」

よく知るお姉さんだが、おとな君はキョドキョドと周囲を見回す。

「ああ、そういえば、お姉さんの部屋入るの初めてね。オトちゃんの部屋は家族用だけど、ここは一人暮らし用だから狭いでしょう？ 玄関入ってすぐに食卓だし、あとは奥の寝室しか部屋がないし」

同じマンションなのに、間取りや内装がまるで自分の家と違うので、不思議な気分になる。

「ご飯、こんな簡単なものしか作れないけど、許してね」

食卓に並んだ料理に、おとな君は小さく「美味しそう……」と声を漏らす。

「じゃ、オトちゃんはそっちに座って」

「いただきます！」

「どうぞ召し上がれ」

おとな君は席に着くと、元気よく料理を口に運ぶ。

「おいしい？」

「うん！」

「よかった。おばさんの料理が美味しいから、私のが口に合うか心配だったの」

「うちのご飯より美味しいかも。ありがとう！」

「うーん、お礼なんかいいのよ」

おとな君はお姉さんを実の姉のように慕っている。

「私の方こそ大学に入って上京してきてからずっと仲よくしてもらって、本当にお隣さんに恵まれたって思ってるんだから。それに二週間分の食費とお小遣いももらってるし。くすっ、ちやんとお小遣い分くらいオトちゃんの面倒見ないと」

お姉さんはおとな君がモグモグと食べていく様を微笑ましく見守る。

「そういえば東京に来てからもう7年になるのね。お姉さん、最初はオトちゃんのこと、オトナ君って呼んでたわね。おじさんとおばさんの呼び方が移っちゃっていつの間にかオトちゃんになってたけど。オトちゃんはどうの呼ばれ方がいい？」

「うーん、どっちでもいいよ？」

「フフ、そう、どっちでもいいの。じゃあ今まで通り呼ぶわね」

「さすが男の子、いっぱい食べたわね」

からになった皿を前に、おとな君は満足していた。

「ご馳走様！ 本当に美味しかったよ。でも作るの大変だったでしょ？ 次からもうちよつと簡単に作れるものでいいよ？」

「ううん、夜もたくさん作るから遠慮しないで食べなさい」

「はは、ありがとう。……あれ？」

おとな君は自分の体に異変を感じる。

「：あら、どうしたの？」

急に心臓のドキドキが激しくなって、息も荒くなった。

「具合悪そうじゃない。汗もかいてしまっ。お姉さんの料理のせいかしら？ お腹が痛いのか？ おとな君は首を横に振る。

「ちがう？ でも、なんだか苦しそうね」

「どうしちゃったんだろう……？」

「ちよつと横になったほうがいいわ。寝室で少しだけ休みましょ？ ほら、肩貸してあげるか

「ら」

お姉さんの肩を借りて、寝室に移動する。

「さ、横になりなさい」

「え………？」

ベッドに寝かされながら、おとな君はその光景に目を見開く。

「なにここ……？」

「え、この部屋？ お姉さんの寝室よ。他に部屋がないから自宅で研究するときはこちらでやってるけど」

おとな君は部屋に並ぶ見たことのない機械に目を奪われる。

「ここに並んでる機械も全部私が作ったの」

「なんの……？」

「何の機械かって？」

お姉さんはおとな君の頭を優しく撫でながら話す。

「お姉さん、人体に関する研究をしてね、最近は薬にも興味があつて、媚薬っていうのを作

ったりしてるの。さつきオトちゃんが食べた料理にも混ぜてみたんだけど、たぶん苦しいのはそのせいね」

「は……………？」

お姉さんが聞き捨てならないことを言う。

「大丈夫、健康を害することはないわ。テストステロンを分泌させる成分を中心にあれやこれやいろいろ混ぜただけで、安心して、とにかく性的興奮状態になっているだけ。自分の意思と関係なく興奮させられて困惑して苦しいと感じているのね」

「なんでそんなこと……………」

おとな君が喋ろうとすると、お姉さんはおとな君の口に人差し指をあてて黙らせる。

「さつきからお姉さんの胸元をチラチラ見てしまうでしょう？ 肩を貸した時に胸の柔らかいのが当たって、余計苦しくなったのよね？ ほら、そんなに女の人の胸をジッと見たら、変態だと思われるわよ？」

たしかになんだかお姉さんの大きく開かれた胸がいつもより気になる。

「フフ、そういうイケナイ子は、こうやって両手両足をベッドの支柱にベルトで固定して…動

けなくして：つと」

「えっ……えっ……？」

おとな君は急に拘束されて困惑する。

抵抗しようにも体がうまくいうことをきかない。

「そうそう、この部屋中にある機械が何かって話だったわね。これはね、全部男の人を射精させるための機械。お姉さんの専門はね、男の人の性的快楽の研究で、今度の博士号をとるための論文に、たくさんデータサンプルが必要なの」

お姉さんがおとな君のふとももを撫でながら言う。

いつもの優しい口調だが、その雰囲気がおとな君を怯えさせる。

「そうだ、オトちゃん、……お姉さんの研究……手伝ってくれない？」

「え、手伝ってくれないの？」

恐怖のあまり、おとな君は首を横に振った。

「お姉さん、怖いよ……」

「怖い……って、何が？」

「何がって……」

「動けないから？ でも、動かれるとうまくデータがとれないの。大丈夫、オトちゃんはここで横になっているだけでいいから。簡単でしょ？」

どんどん恐怖が増していく。

「イヤだよ……」

「……どうしてもいやなの？ こんなにお願いしても？」

おとな君はフルフルと首を振る。

「ふーん……、それじゃあゲームで決めましょ」

「ゲ、ゲーム……？」

「お姉さんの機械をひとつ試してみて、オトちゃんが10分間射精を我慢できたら許してあげる」

「イヤ……、イヤ……」

おとな君は体の違和感と、お姉さんの豹変ぶりに混乱している。

「イヤイヤって、ワガママばかり言って……。お姉さんの話聞いてくれない悪い子のお口は、ガムテープでふさいじやいましょう」

「んー！」

お姉さんがおとな君の口をテープで完全にふさいでしまう。

「……うん、これでいいわね。それじゃあ、試す機械は、これにしてみようかな」
いくつもの棚に並ぶ機械からひとつを選ぶ。

「よくあるオナホール型のシンプルなさくせい搾精機だけど、無機質に絞るには一番効率がいいわね
ホールの内側、ほら見て、硬さと穴の広さを空気圧で自由に変えられるシリコンで、壁面がヌルヌルしてて複雑にヒダが並んでるでしょ？」

お姉さんは喋れないおとな君の目の前に機械の穴を見せつける。

「温度を45度まで加えられるようにヒーターを入れてみたから、ずっと温かい肉にみっちり包まれた感覚を味わえるわ。内蔵センサーでオトちゃんのおちんちんのサイズや硬さをリアルタイムで感知して、おちんちんが勃っついようが萎えていようが、カリの位置をいつでも的確に見つけ出して、ヒダで容赦なくピストン刺激できるの」

言いながらいくつかにわかれたパーツを組み立てていく。

「先端のホースはサンプルになる精液を吸い出すために付けたのだけど、ピストン運動中にバキューム刺激も与えられるのよ？ これだけの機能をこのスリムボディに搭載できたなんて、わりとすごいでしょ？」

笑顔のお姉さんと対照的に、おとな君はガタガタと震えて首を振って拒絶を続けていた。

「もう、なんでずっと首を横に振ってるの？ 男の子なんだからいさめな潔く勝負しなさい」

お姉さんは不意にハサミを持ち出してきたので、おとな君はいよいよジタバタと暴れる。

「んーーーーー！」

「ああ、大丈夫よ、このハサミはオトちゃんおとちゃんの服を脱がすために使うだけ」

お姉さんがおとな君のズボンにハサミを入れていく。

「新しい服、買ってあげるから。ズボンをジョッキジョッキ……パンツもジョッキ、ジョッキ……」
おとな君の下半身があつという間に裸にされてしまった。

「フフ……これがオトちゃんのおちんちんなのね。イヤイヤって言いながらこんなに硬くして……」

おとな君は自分の股間が勃っていることを知って、顔を赤くしながら「違う違う！」とふさがれた口の中で弁解する。

「そうよね、薬のせいよね？ けして搾精機の説明を聞いてムラムラしたわけではないのよね？ 大丈夫、お姉さんはわかってるわ。オトちゃんは機械なんかでおちんちん気持ちよくなっちゃうような変態さんじゃないってこと」

お姉さんが妖艶な表情で言う。

「あとはオトちゃんが10分間我慢してそれを証明すればいいの。楽勝よね？」
いよいよ逃がしてもらえないことを悟って、おとな君は青ざめる。

「あらあら、怯えた顔おびをして……」

お姉さんがおとな君の肉棒をじっくり観察している。

「……ねえ、オトちゃん、……このおちんちん、女の人に入れたことはある？」

おとな君は返答に躊躇ちゆうちゆうしたが、嘘をつくともっとひどい目に合うのではないかと正直に経験がないことを首を振って伝える。

「そう、じゃあこの搾精機が初めての相手になるのね」

その言葉を聞いて、おとな君は悲しくなった。

「そんなに泣きそうな顔をしないで、お姉さん光栄に思ってるのよ？ オトちゃんがおちんちんを穴に入れる瞬間に立ち会えて」

お姉さんのフオローがまったく嬉しくなかった。

「入れるよ？」

「んーんー！」

おとな君は抵抗を試みるがまったく体が動かせない。

「童貞さんだから、ゆっくりゆっくり入れるね。ローションでヌメヌメのシリコン穴の、温かい肉壁に包まれていくのがわかるでしょう？」

ズヌヌヌ…と、肉棒全体が圧迫されながら包まれていくのがわかった。

初めての感覚に、おとな君は両足をピンと伸ばす。

「もう息があがってきてる。入れただけでそんなに体中硬直させちゃって…。ほら、リラックスして」

お姉さんが機械を固定するパーツをおとな君の腰回りにあてがう。

「腰にもベルトして…これに搾精機を固定して…フフ、これで搾精機の刺激から逃げられなくなったわね」

「ふしゅー！」

おとな君は「逃げられない」という言葉に再び暴れてみるが、ベッドが軋んだだけで拘束がどうにかなる気配はまったくくない。

「じゃあタイマーを10分にセットして、このアラームが鳴るまで我慢できたら、オトちゃん
の勝ち。いいわね？」

お姉さんは満面の笑顔でスイッチに指を置く。

「スイッチ、オン」

お試し版をお手に取っていただき
ありがとうございました。
この続きは製品版にてお楽しみください。



おとな君の
からっぽになるまで。

発行 ヴォイスウェア
著者 佐曾井 享綱
イラスト F.S

※本作品の全部または一部を無断で複製・転載・配布・送信・販売することを禁じます。

info@voiceware.org

おとな君の

ボイスドラマ版

からっぽになるまで。

男の子がお姉さんに絶対守れない約束を強要されて、
からっぽになるまで搾られる話。



Episode 1

搾精ガジェット研究員



Episode 2

ヤンデレ看護師



Episode 3

ローションJK



Episode 4

不当尋問警官



Episode 5

不道德修道女



Episode 6

職権濫用女教師



Episode 7

無機質な使用人

R18
ADULT
ONLY

VOICEWARE